

Title	タガログ語指示詞とその指示構造
Author(s)	吉村, 近男
Citation	大阪外国語大学学報. 75(1-2) p.25-p.47
Issue Date	1988-03-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81173">https://hdl.handle.net/11094/81173</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# タガログ語指示詞とその指示構造

吉 村 近 男

## How do Demonstratives Refer in Tagalog ?

by Chikao YOSHIMURA

Demonstratives in Tagalog present a three-way distinction as follows: (I)ito, (II)ian, and (III)iyon. (Here we take angforms as representatives of each series.) And they have two kinds of usage: situational reference and textual reference. The former usage has been the main target of linguistic treatments so far given regarding referential functions of the demonstratives, while the latter has simply been neglected. This does not mean, however, that nothing remains to be done with the former usage.

This paper focuses on investigating further the referential functions that the above-mentioned demonstratives have in each of their usage with special reference to interactions between them.

We argue, based on the results acquired in the present analysis, that the first-series demonstratives are chosen when the speaker-writer positively highlights his own viewpoint with relatively less concern about the existence of the hearer-reader. The second-series demonstratives are used when the speaker expects a kind of interactional feedback on the part of the hearer. Therefore, it cannot be used in narrative paragraphs. The third-series demonstratives provides background information with the speaker-hearer/writer-reader.

### 0. はじめに

タガログ語の指示詞は、そのang形である ito, iyan, iyon に代表されるように、基本的に三項対立をなしており、その点に関する限りでは、日本語の指示詞「こそあ」と同質で、this, that の二項対立を示す英語とは異質である。しかし問題はこの事実が拡大解釈を受けて、タガログ語と日本語のそれぞれの指示詞の指示範囲までもが相関的であるとする説明が時になされることがあることである。具体的にはその立場では ito = 「これ」、ian = 「それ」、iyon = 「あれ」という同定が行われている。

こうした考え方は確かに事実のある側面をかなりの的確に説明しうるものであり、入門的段階における教授法としてはそれなりに効果的であろう。しかし、数多くの実際の指示詞の運用例の中にはそのような簡明なスキーマではとらえられないもののがかなり見いだされる。その理由の検討が以下の小論の目的であるが、その理由の内の一つの大きなものとして指示詞の situational reference と

textual reference とが上記の考え方では区別されていないことが指摘できる。従ってこれまで適切に説明できなかった指示詞の運用例を例外的現象として処理するとかといった便宜的措置は実際上許されないし、また両言語の対照研究上も有効な方法ではないと考えられる。

## 1 指示詞のセット

本論に入る前にまずタカログ語の指示詞のセットを一覧表で示す。<sup>(1)</sup>

	ang形	ng形	sa形	nasa形	gaya形	heto形
(I)	ito	nito	dito	narito	ganito	(h)eto
				nandito		
(II)	iyān	niyān	diyān	nariyān	ganyān	(h)ayān
				nandiyan		
(III)	iyon	niyon	doon	naroon	ganoon	(h)ayun
	yaon	noon		nandoon	gayon	

このように指示詞には整然とした形態上の派生関係が見られる。小論ではこの派生関係は (I) (II) (III) の各系列の機能上の対立関係に対応するものであるという作業仮説をとる。つまり、たとえば ang 形について述べられたことは ng 形にも sa 形にもその形式固有の意味を除けば当てはまるものとし、形態変化によって各系列の対立関係に変動はもたらされない、と原則的に考えておくことにする。

## 2 指示詞の用法に関する従来の考え方

管見によれば、タカログ語の指示詞の意味機能が組織的に論じられたことはこれまで一度もない。Lopez (1981) はタカログ語とマライ語（＝インドネシア語）との全般的な対照研究を行い指示詞も論じたが、そこでは形態論的現象が中心となっており、意味上の区別にはごくわずかししか触れていない。事情がこのようなので、以下ではいくつかの代表的文法書・入門書の類によって指示詞の意味機能に関するこれまでの取り扱いを概観してみたい。

### 2.1 フィリピン人研究者の場合

Alejandro (1946: 82-3), Aspillera (1969: 20-1), Ramos (1971: 25-7), Llamzon (1976: 122-3), Lopez (1981: 24-6) などによる指示詞の意味的区別に関する解説は Ramos のものを除いてほぼ異口同音である。たとえば Llamzon によってそれを示すと、各系列ごとの意味とその英訳はそれぞれ (I) near-speaker (this), (II) near-addressee (that), (III) far-from-speaker-addressee (that yonder) である。つまり、純粹に対話の当事者である話し手及び聞き手のそれぞれに対しての（明言されていないけれども、そこに挙げられている単文例からほぼ確実に了解さ

れるように、物理的な) 遠近に基づいて各系列ごとの意味が定められている。

一方 Ramos はこの点についてももう少し微妙な説明を与えている。それによれば指示詞の各系列ごとの意味は次のようである。

(I) what is spoken of is nearer the speaker than the listener or near to both

(II) the object spoken about is near the listener and far from the speaker or a short distance away from both

(III) the object is far from both speaker and listener or farther away than that indicated by iyan

つまり三者間の意味上の区別は、話し手と聞き手という二点からの指示物に対する相対的距離に加えて、話し手と聞き手の集合からの指示物に対する相対的距離をも考慮に入れて決定され则认为られている。

また Lopez (1981:28) が指示詞 iyan には定冠詞的機能が全くないと述べていることは、その用法の解明に向けて役だつてであろう。

## 2. 2 アメリカ人研究者の場合

Bloomfield (1917:148-9), Bowen (1965:158-63), Schachter and Otnes (1972:91-93) などが指示詞の意味的差異に言及しているが、基本的に 2.1. で触れた Ramos 以外のフィリピン人研究者のそれと同類の説明方法がとられている。<sup>(2)</sup> ただ Schachter and Otnes には若干の新しい指摘が見られる。それは第一に、(II) の系列の指示詞は話し手よりは聞き手に近いものを指すときに用いられるが、それはほぼ聞き手の腕の届く範囲内のもの (approximately within arm's reach) であること、第二に指示詞は抽象物、状況、行動などを指すときにも用いられるが、その時は話し手や聞き手に対する心理的接近性 (psychological proximity) が関わっていること、第三に指示詞は人間をも指しうることである。しかし、残念なことに具体例が乏しく詳細が不明である。たとえば、第二点については (1) のような、第三点については (2) (3) のような例文と英訳とが添えられているくらいのことである。

- (1) Mahirap na kalagayan  $\left\{ \begin{array}{l} \{ \text{ito.} \} \\ \{ \text{iyon.} \} \end{array} \right\}$

$\left\{ \begin{array}{l} \text{'This'} \\ \text{'That'} \end{array} \right\}$  is a difficult situation.'

- (2) Maglalaba ito ; magpaplantsa iyon.

'This one will wash ; that one will iron.'

- (3) Nakita ko si Linda. Maganda iyon.

'I saw Linda. She's beautiful.'

(2) は, ito と iyon の対比例である。(3) は人称代名詞 siya の代わりに用いられる指示詞 (とくに iyon) の例であるという。

### 2. 3 ソビエトの研究者の場合

Ilo epeck (1976: 388-90) や Paykob (1981: 168-70) に指示詞についての言及が見られるが, 両者とも Schachter and Otnes の第三の指摘と同趣旨のことを述べる以外は Ramos 以外のフィリピン人研究者と基本的に異なるところがないので省略する。ただ後者では次のような例文が引かれているところがこれまでと異なるところである。

(4) Nakaupo ito sa isang malaking bato.

彼は大きな石にすわっていた。

### 2. 4 イスパン人研究者の場合

年代的にいささか古めかしい感じはするものの, 指示詞に三項対立を示すイスパニア語の話し手による記述を辿ってみることも無駄ではないであろう。

Totanes (1865: 13-6), Minguella (1878: 24-5) などがタカログ語の文法書を書き残しているが, そのいずれも指示詞に関しては, イスパニア語の指示詞の三系列 (I) este (II) ese (III) aquel との同定を行っているのみである。また, ito は話し手にも聞き手にも同程度に接近しているものを指すときに用いられると述べている。しかし, それは実は指示詞の特殊系列である yari (話し手に極めて接近しているものを指す) との対比においてそのように規定されているにすぎないことに注意すべきであろう。実際 Minguella は当時すでに指示詞 yari の領域が ito によってかなり侵されていると記している。

### 2. 5 従来の考え方の総括

以上の概観によってタカログ語の指示詞に対する従来の取り扱い方, 並びにその不備な点が明らかになったと思われる。その主要な点を箇条書にすると次のようである。

- (a) 指示詞の各系列の規定に際しては, 個としての話し手または聞き手からの指示物までの距離のみならず, 話し手及び聞き手の集合からの指示物に対する距離をも考慮しなければならない。
- (b) (a)でいう距離とはいかなる性質のものか考察する必要がある。
- (c) 指示詞が物のみならず人をも指すとする, 人称代名詞との相違が問われる。
- (d) 従来の記述は指示詞の situational reference に偏っていて, textual reference がほとんど全くといっていいほど触れられていない。またその指示詞の両用法を統一的に説明すべきか否か問題となる。

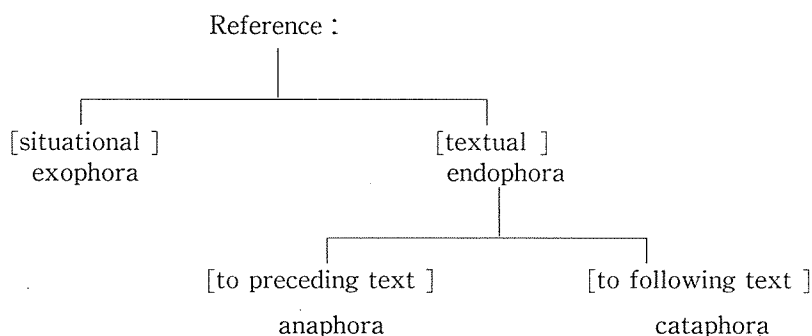
ここで述べた従来の記述の不備の理由はかなり明白であろう。それは多くの入門書において指示詞の導入は比較的早い時期に行われるために, 必然的にその説明が具体的実際の場面を伴った

situational reference に限られてくるからである。また文法書であっても、そうした場面を主として念頭において記述をすすめているからである。

以上のような理由で、小論では textual reference の検討に主眼を置く。しかしそれに入る前に、従来の situational reference に関する記述にも具体例が乏しく不明瞭なところがあるので、まずその点についてインフォーマント調査・文献調査を行う。

### 3. 指示詞の situational reference

調査の結果を考察する前に、これまでややルースに用いてきた指示詞の二用法について Halliday and Hasan (1976: 31-7) に基づいて定義をしておきたい。



- situational reference (= EXOPHORA, or EXOPHORIC reference)  
= referring to a thing as identified in the context of situation
- textual reference (= ENDOPHORA, or EXDOPHORIC reference)  
= referring to a thing as identified in the surrounding text

つまり指示詞がなにかあるものを指示 (=reference) する、すなわちなにかあるものに依存することによって初めてその指示詞の意味解釈に必要な情報が得られるというとき、その依存先は言語外の事物であってもよく、言語内の事物であってもよい。そして前者を situational、後者を textual と呼ぶ。textual reference はさらにその指示の方向によって anaphora と cataphora に分かれる。尚、この指示現象の基本的前提により、指示物 (referent) は常に何らかの方法に基づいて同定可能 (=identifiable) であることが保証されている。しかし、もし仮に、たとえば文脈から切り離されることなどにより、その同定の手段が全く失われたならば、その指示の性格はまったく無色透明で中立的なものになってしまうと考えられる。従来の指示詞に関しての散発的記述が明瞭さを欠くのもそのためである。

## 3. 1 situational reference の典型的ケースについて

通常の入門書、文法書においてタカログ語指示詞の使用法が述べられる時、その典型的使用例としてしばしば与えられているのは指示詞を含む次のような対話例である。

- (1) Ano ito ? ..... Lapis iyan.  
 これは何ですか。 ..... それは鉛筆です。
- (2) Ano iyan ? ..... Lapis ito.  
 それは何ですか。 ..... これは鉛筆です。
- (3) Ano iyon ? ..... Lapis iyon.  
 あれは何ですか。 ..... あれは鉛筆です。

これは既に 2.1. で列挙した Ramos 以外のフィリピン人研究者に典型的に見られたような、対話の当事者であり、且つ対じしている話し手及び聞き手のそれぞれと指示物との相対的距離に基づいた指示詞の使用法に対する説明に合致する例である。

事実が以上のことに尽きるならば何ら問題はない。しかし Ramos は 2.1. でやはり述べたように、話し手と聞き手の集合からの指示物に対する距離の問題も指示詞の選択に関わってくると考えている。この意見は次のような対話例が成立するということによってその正しさを確認しうる。

- (4) Ano ito ? ..... Globo ito.  
 これは何ですか。 ..... これは地球儀です。
- (5) Ano iyan ? ..... Globo iyan.  
 それは何ですか。 ..... それは地球儀です。
- (6) Ano iyon ? ..... Relos iyon.  
 あれは何ですか。 ..... あれは時計です。

(4) も (5) も並んで座している話し手及び聞き手の眼前にあるテーブルの上に両者からほぼ等距離の位置に地球儀が置かれている場面での対話である。(6) はその話し手及び聞き手の双方から遠く離れた壁の上に時計が掛かっている場面である。いずれの対話例においても質問とその答えに同一の指示詞が用いられている。なお、(6) は (3) と同じことになるが、これは話し手及び聞き手のそれぞれからの指示物に対する遠近も、話し手及び聞き手の集合からの指示物に対する遠近も、指示物に対話の当事者から遠く離れていることによって、いわば中和された状態になっているからであろうと思われる。

むしろ問題は (4) (5) との相違点にある。話し手も聞き手も座しているので、指示物との物理的遠近に大きな違いを認めることはできない。また他に、そこでの対話の当事者の身体と身体の間にはボールペンが置かれており、そのボールペンと話し手及び聞き手との物理的距離は(4)における地球儀とのそれよりも短い(7)のような場合において、第二系列の指示詞 iyan が質問とその答えに共に用いられる事実があるが、それは対話の当事者と指示物との物理的遠近に重きを置く指示詞の用法説明とは決定的に相入れない性質のものである。

(7) Ano iyan? ..... Bolpen iyan.

それは何ですか。

それはボールペンです。

ここではやはり対話の当事者と指示物との物理的遠近よりもむしろ心理的遠近の方に注目しなければならないであろう。実際、(4)は手を地球儀に伸ばすような動作、覗き込むような視線、興味深々といった発声などを伴って発話されたのに対し、(5)や(7)はむしろ視線は別として顔や身体を指示物からそらすような動作、興味の無さそうな発声などを伴って発話されていた。これらの身体表現は対話の当事者における心理的動きの具体的実現であるとみなされるべきである。また、(7)の状況においても、話し手は第一系列の指示詞 *ito* を使って *Ano ito* ? と言ってもよいが、その場合話し手には(4)で見られたような身体表現が伴い、そしてその発話には勢い (*force*) があるというコメントが得られた。

ところで、以上の(1)–(3)の状況と(4)–(7)の状況とは互いに厳密に区別されているものであろうか。試みに(4)や(5)の場合において地球儀を話し手や聞き手の方に向かってずらしていくと、結局のところ(1)や(2)の場合と区別がつかなくなってしまう。つまり、Ramos 以外のフィリピン人研究者に典型的に見られたような指示詞の用法を物理的見地から説明する立場からともすると想像されがちであるように、質問とその答えにおいて自動的に *ito/iyon*, *iyon/ito* という指示詞の交替現象が生じ、その他の可能性はない、というような考えは誤りであり、指示詞の選択は対話の当事者であるそれぞれのその主体的立場において決定されていることが明らかとなった。しかもその選択は指示物との心理的距離に基づいてなされているといえる。その心理的遠近の度合いに応じて質問とその答えにおいて指示詞の交替が見られたり見られなかったりするるのである。(1),(2)においては話し手と聞き手との指示物に対する心的態度が異なり、(4), (5)においては同様であると原則的に考えることが許されるであろう。心的態度が同様であれば、それは話し手と聞き手が集合として指示物に心的に対じしているとみなすこともできるであろう。以上の点は(3), (6), (7) についても当てはまる。

なお、(6)において質問の受け手が時計のところまで歩いていき、そこで返答を行うことによって(8)のような対話を完成させることができるようである。

(8) Ano iyon? ..... Relos ito.

あれは何ですか。

これは時計です。

つまり第三系列の指示詞 *iyon* も質問とその答えにおいて状況がゆるせば交替可能である。従って、個々の系列の指示詞についてその使用法が一応他の系列とは別個に規定されなければならない、と考えられる。

### 3.2 指示詞と指示物としての人

指示詞は 2.2. で述べた Schachter and Otnes の指摘の通り、人間をも指示物として取りうる<sup>(3)</sup>。そして、そこで挙げられている例 2.2.(2)の他にはたとえば次のような場合がある。

(9) Sino ito/iyon/iyon?



これ／それ／あれは誰ですか。

すると、ここではたとえば三人称の人称代名詞 *siya* を用いた(10)のような文との差異が問われることになるが、一般的に言って指示詞を用いると人称代名詞を用いた場合よりも相対的に尊敬度の落ちる、人を見下したような表現方法になるようである。

(10) *Sino siya?*

彼／彼女は誰ですか。

この点は指示詞が人間をその指示物とする時、専らその指示機能にのみ着目し、指示物の性格を特に考慮に入れておらず、半ば物扱いしているのであると考えることによって説明されると考えられる。

### 3. 3 situational teference のまとめ

以上、タカログ語の指示詞の *situational reference* について観察してきた点は日本語の指示詞「こそあ」についてもほぼ該当すると考えられる。従って観察がこの段階に留まる限りにおいてタカログ語の指示詞の用法と日本語の指示詞の用法とに有意義な差異の存在が感じられることがないであろう。従来の文法書・入門書類もすべてこのような段階に留まっていると思われる。

ところで、この *situational reference* 用法においては全系列の指示詞が用いられている。そして、3.1.で見たように具体的な対話場面においては同一の指示物を複数の指示詞が指しうるのであるが、それは書かれたテキストとしての *dramatic paragraph* においても同様であろうか<sup>(4)</sup>。

(11) *Mando : (Iaobot ang glab ) Iiwan ko na sa 'yo ito.*

*Anong : Ano ito ?*

*Mando : Galing pa sa tatay ko ' yan. Naikuwento ko na ba ? Boksingero ang itay ko.*

*Anong : Putris ! E, anong gagawin ko rito ?*

*Mando : Itago mo. Malay mo, baka may tumubong boksingero diyan sa mga anak mo.*

*Ako'y walang pamamanahan. (BCPL:118)*

*Mando : (グラブを手渡す) 君にこれを残しておくよ。*

*Anong : これは何?*

*Mando : それは父さんのものだったんだ。話したことがあったかなあ? 父さんはボクシングの選手だったんだよ。*

*Anong : へーっ! で、これをどうするの?*

*Mando : 取って置いたらどう? ひょっとすると君の子供にはボクシングをやるものが出るかもしれないからね。僕には取って置いてやるものもないし。*

(12) *Dulce : (Ibababa ang maleta. )Mama, maaari po bang magtanong ?*

*Anong : (Hindi pansin ang babae. )Oo.*

Dulce : Papaano ho ba ang daan papunta sa San Jose ?

Anong : May kalye *roon*. (Ingunguso.)

Dulce : Saan ho ?

Anong : (Mapapatunghay )*Doon*.

Dulce : *Doon* ho ? (Bahagyang magugulat pagkamalas kay Anong. )

Anong : (Tatayo)Halikayo. (BCPL:119)

Dulce : (スーツケースを降ろす)おじさん,尋ねたいことがあるのだけでも?

Anong : (女に目を向けない)ああ。

Dulce : サン・ホセに行くにはどう行ったらいいでしょう?

Anong : あそこに通りがあるよ。(口で指し示す)

Dulce : どこでしょう?

Anong : (顔を上げる)あそこさ。

Dulce : あそこですって?(アノンを見て少々驚く)

Anong : (立ち上がる)おいでなさい。

インフォーマントによれば,上記二例における指示詞はすべて他の系列に交換不可能である。それはある意味で当然のことであろう。テキストにおいては対話の当事者の存在位置はすでに決定されテキスト内に示されているか,あるいは読者の常識的判断に委ねられているのであるから,それを任意に変更するとテキストの流れそのものが破綻してしまうのである。この点,例えば後に4.1.(1)について見るように textual reference 用法とは異なった様相を呈することになる。

なお, situational reference 用法においては話し手及び聞き手という対話の当事者が存在するのであるから,それらと密接な関係を持つ第一及び第二系列の指示詞が全体として, 中立的存在である第三系列指示詞に対立していると考えられる。実際, インフォーマントの直感では,前二者はそれぞれ手で触れようとおもえば触れることのできる範囲内の指示物に使用されるが,後者はそうではないという。

#### 4 . 指示詞の textual reference

指示詞の textual reference の考察に入る前に小論では discourse に対し Longacre(1974:358)流の Tagmemics における以下のような genre の区別をその方法論的有效性を認めた上で設定する<sup>(5)</sup>。

	-Prescriptive
+ Succession (chronological )	Narrative (many types) 1. 1/3 persons 2. Actor oriented 3. Accomplished time encodes as past or present 4. Chronological linkage
	Drama 1. Multiple 1/2 person 3. Accomplished time as concurrent 5. Dialogue paragraphs without quotation formulas

以上の discourse genre の分類はあくまでも各 discourse 全体の組み立て方に基づくものである。従って例えば narrative discourse とは [+ Succession(chronological)] と [-Prescriptive] という二大基準により確立された discourse であり、その個別的特徴はそこに示されている通りであるが、その discourse 全体を構成する下位単位としての paragraph は常に narrative paragraph であるとは言えない。そこには話し手及び聞き手という対話の当事者によって遂行される対話を現す dramatic paragraph も引用の形でたいていの場合に含まれてくるからである。故に以上の genre の分類方法は paragraph のレベルにも discourse genre の分類とは一応別個に適用されなければならない。

そこで 3. に示した指示詞の situational reference 及び textual reference と genre との関係は次の通りであると考ええる。narrative discourse における narrative paragraph 及び引用表現の伝達部 (Reporting Clause)<sup>(6)</sup>は対話の当事者によって現に遂行されつつある対話を示すものではないがために、それは場の脈絡 (context of situation) から切り離されており従ってそこでは指示詞には situational reference が適用されえず、前後の text によって指示物が決定される textual reference のみが適用可能であると予想される。一方、dramatic paragraph 及び引用表現の被伝達部 (Reported Speech)<sup>(6)</sup>においては当事者間で現に遂行されつつある対話が示されているのであるからそこに現れる指示詞には situational reference も前後の text(ここでは発言内容)に関わる textual reference も共に適用可能であろう。以上のような理論的想定のもとに今後の記述を進めていく。尚、その際 narrative paragraph の分析に主眼を置くことにする。

#### 4. 1 narrative paragraph における指示詞の互換性と第二系列指示詞

ここでは、以上の理論的想定が narrative paragraph に使用されている指示詞の分析にとってどのように関わってくるかを考察する。

narrative paragraph に使用されている指示詞の第一の特徴は先に 3.3. で触れたような drama に

おける situational reference 用法の指示詞の場合とは異なり、その指示詞がしばしば指示物に変更を伴うことなく互いに交換可能であるということである。

- (1) Dahil kay Balbino Marcial, si Benigno ay hindi na pumapasyal sa customs upang ayusin ang tungkol sa mga kliyente niyang tulad ni Carlos Lim. Ang bahay niya ay lalo pang lumaki't naging marangya dahil sa salapi ni Lim, na ni wala namang tutol sa pagbibigay sa kanya, sapagkat *ito'y* idinaragdag niya sa halaga ng kanyang mga ipinagbibili. *Iyon* ay tinatawag niyang representation expenses, na binabawas pa niya sa ibinabayad na buwis sa gobyerno. Para kay Lim, ang pagbabayad ng suhol kay Benigno ay isang bahagi lamang ng negosyo. Para kay Benigno naman, *ito* ay isang mayamang palabigasan. (SSL:30)

Balbino Marcial のいるおかげで Benigno はもはや Carlos Lim のような自分の御得意様向けの仕事を片付けに税関に出向くことがなかった。家は Lim からのお金のおかげで更に大きくなり豪勢になった。もっとも Lim は Lim でその分だけ自分の売り物の価格を水増ししているから、Benigno に心付けすることにやぶさかではなかったのである。また、Lim はそれを接待費と呼んで政府に払う税金からの控除も受けていた。Lim にとっては Benigno に賄賂を贈ることは商売の一部に過ぎなかったのだ。Benigno にとってもそれは実入りの多い生業であった。

インフォーマントによればこの narrative paragraph における三つの指示詞の内特に三番目の *ito* について、それを *iyon* は不可であるが *iyon* には変更可能であり、その場合にはその指示物は「お互いによく知っている」ものであると感じられるという。指示詞の第一系列の *ito* と第三系列の *iyon* とはその situational reference 用法においては 3.3. で述べたように互いに近い関係を持っていないと思われる。しかし、上記の paragraph においては三番目の *ito* が *iyon* と交換されうるし、しかもその指示物に何らの変化も見られないのである。従って narrative paragraph における指示詞の textual reference 用法にとっては指示物とその paragraph の登場人物や作者との物理的遠近が situational reference 用法にとってよりも一層無関係であり、心理的遠近性が相対的にそれだけ大きくクローズアップされてくる、というかなり当然の結論に至る。

むしろここで問題となるのは、上記の paragraph に現れる三つの指示詞のいずれもが第二系列の指示詞 *iyon* によって取って変わることがないということであろう(7)。インフォーマントによればそれらはすべて不可である。実際に手持ちのテキスト資料を調べてみても第二系列の指示詞が narrative paragraph 内に用いられていることは極めてわずかな例外を別格とすれば原則的に無い<sup>(8)</sup>。しかし、dramatic paragraph においては 3.3.(11)(12)に見られるように全系列の指示詞が用いられる。すると、先に 4. で述べた理論的想定からすれば、この第二系列の指示詞の使用可能性の有無は指示詞の situational reference 用法の有無と不可分であるのではないかという予想がまず一応成立するであろう。つまり、第二系列の指示詞は textual reference 用法しか存在しない状況下では使用不可能なのではないかと予想されるのである。2.1. で見た Lopez による指示詞 *iyon* には定冠

詞的機能が全くないという考えはこうした予想に基づいているのではないかとと思われる。

しかし、その予想は誤りであると考えられる。タカログ語の指示詞はその全系列に situational reference 用法と同様に textual reference 用法を備えているのである。第一及び第三系列については4.2.及び4.3.で言及されるので、ここでは第二系列の例のみ示すことにする。

- (2) "Ayoko," mariing tugon ni Virginia. "Mas maligaya tayo noong ang buhay natin ay simple lamang."

" Ay naku, Virgie — walang mangyayari sa atin kapag *ganyan* ang usapan. Mabuti pa, ay magtuloy na ako sa opisina."(SSL:6 )

「いやですよ」とVirginiaはきっぱりと答えて言った。「以前質素に暮らしていた時の方が私達もっと幸せだったわね。」

「なんてこった, Virgie, そんなこと言っててはどうにもならないぜ。もうオフィスに行った方がましだなあ。」

- (3) "Benigno, iniibig kita nang lubos," wika ni Virginia. "*Iyan* ang dahilan kung bakit ako'y lubhang nag-aalaala sa iyong mga...mga services rendered. Hindi mo ba alam na maging si Conrado ay nasabi na rin '*yan* sa akin ? Siya man ay lubhang nag-aalaala sa inyo..." (SSL:37)

「あなたをとっても愛しているわ, Benigno 」と Virginia は言った。「だからあなたのあの「サービス提供」活動のことをこれほど心配しているんじゃないの。Conrado だってそのことを私に注意したってことを知らないの? あの子もあなた達のことをとても心配しているのに... 」

インフォーマントによれば、例えば (3) の最初の *ian* は Virginia の愛を指し、二番目の '*yan* は Benigno の「サービス提供」活動をさしているという。また、前者は *ito* にも *iyon* にも交換可能であり、それらの三系列の指示詞にこの文脈においては大きな違いはないとのことである。

事情が以上のものであるとすると、先の narrative paragraph に第二系列の指示詞が使用されないという点はどのように説明されるであろうか。それには 4. に示した genre の区別に立ち返らなければならない。

narrative paragraph とは一人称または三人称の登場人物を中心に筋が展開する語りの形式であるが、そこには聞き手としての二人称の人物が参加することがない。もちろん、作者(=語り手)に対する読者(=聞き手)の存在も考えられるが、往々にして不特定多数の一方的な情報の受け手としての読者(=聞き手)でしかない。従って作者(=語り手)は一応読者(=聞き手)からのフィードバックを考慮外において物語の筋を展開せしめることができる。一方、dramatic paragraph においては話し手と聞き手とが常に互いの反応を考慮しつつ、その役割を常に互換することによってしか対話が展

開することがない。

すると, narrative paragraph に第二系列の指示詞が現れないのは,そこに textual reference 用法しか存在することを許さない状況そのもの,つまり読者(=聞き手)からのフィードバックを期待しない状況そのもののせいであって, textual reference 用法を持っていないからではないと考えることができる。situational reference 用法も含めて第二系列指示詞は聞き手の現に存在しない状況下では用いえないのである。

ところで,聞き手からのフィードバックが期待されうる限り, 第二系列指示詞は話し手自身の発言内容をも指示しうる。(3)の最初の *iyán* はその例である。この点は聞き手からのフィードバックを期待しているのは実は話し手であるという事実に帰因するものであるように思われる。次も同例である。

- (4) "Mga kapatid, pinagdugtong natin ang ating mga kamay at puso ngayon upang itagtanggol ang ating mga karapatan. Ang ating kalayaan. 'Yan lamang. At 'yan lamang ang ating hinahangad. Nguni't 'ya'y ipinagkait sa atin ng mga Kastilang may lakas at kapangyarihan, .....(後略)(K:52)

「兄弟達よ, 我らが今ここに我らの手と心とを一つにしたのは我らの権利を守るためである。我らの自由を守るためである。それだけである。それだけが我らの望むところである。しかしながら,それは力あり権力あるイスパニア人によって拒絶されたのであり.....

インフォーマントによれば, ここの *iyán* のいずれも *ito* あるいは *iyon* に置き換え可能である。しかしそれにもかかわらず, *iyán* が選択されている理由については「作者のスタイル」であるとか「強調」のためであるとかいった直感的コメントがあった。実際, どのインフォーマントも第二系列指示詞について最も理解の困難さを訴えたが, そこにはこの節でこれまで考察してきたような込み入った心理作用が介在していたのであらうと考えられる。

#### 4. 2 narrative paragraph に現れる人間指示の第一系列指示詞

第一系列の指示詞は4.1.(1)に現れていた二例の *ito* の如く事物, 抽象物, 状況, 行動などを他の二系列の指示詞と同様に指しうる。しかし, それ以外にその頻度数の大きい顕著な用法の一つとして narrative paragraph において三人称代名詞の代わりに人間を指示する場合を指摘しうる<sup>(9)</sup>。そこで次のような二点が問題とされなければならない。第一に, その場合第三系列の指示詞はまず見当たらず専ら第一系列の指示詞のみ現れるが,それはなぜか。第二に, やはり narrative paragraph に現れ人間を指示する三人称代名詞との差異はいかなるものか, ここではまず第二点を検討する。

- (2) Parang binabayo ang dibidib ni Benigno. Malapot ang pawis na gumigisaw, namumuo sa *kanyang* noo, leeg at buong katawan. Ang mga tuhod *niya'y* parang nanghihina, at parang natitiyak *niyang* may malubhang nangyari sa *kanyang* pamilya. Nang magtungo *siya* sa garahe ay nakita *niyang* wala ang Impala. Wala rin ang station wagon. Sinabi sa

<sup>(e)</sup>  
<sup>(k)</sup> *kanya* ng <sup>(h)</sup> *kanyang* <sup>(f)</sup> *tsuper na*” ...<sup>(i)</sup> *narinig ko* <sup>(j)</sup> *po na sila’y* <sup>(l)</sup> *tutungo sa San Miguel.*”

Bahagya <sup>(k)</sup> *siyang* <sup>(m)</sup> *natuwa*. Parang <sup>(n)</sup> *naibsan*, kahit bahagya, ang sakit sa <sup>(l)</sup> *kanyang puso*.  
 Siguro ay <sup>(m)</sup> *umuwi si Virginia* <sup>(n)</sup> *upang dalawin ang mga magulang nito* . Marami nang  
 beses na <sup>(m)</sup> *ginawa ito* ni Virginia. Marahil ay <sup>(o)</sup> *babalik din ito* sa <sup>(q)</sup> *kinabukasan*.  
 Gayunman,<sup>(10)</sup> kung sakaling hindi <sup>(p)</sup> *agad ito* <sup>(q)</sup> *magbalik*, <sup>(q)</sup> *susunod siya*. (SSL:43)<sup>(11)</sup>

Benigno の胸は衝撃を受けたかのようにであった。また、額や首筋や体全体にはべとべとした汗の塊が群れをなして吹き出ていた。膝からは力が抜けたようであり、何か大変なことが自分の家族に起きたということを確信しているようでもあった。ガレージに行ってみるとインパーラが無いことが分かった。ステーション・ワゴンも無かった。運転手によると「みんなはサン・ミゲルへ行くと聞いた」とのことだ。

Benigno は少しばかりうれしくなった。少しばかりではあれ、心の重荷が除かれたかのようにであった。Virginia は恐らく両親の元に帰ったのであろう。これまでに何回もこういうことがあったから、多分翌日には戻ってくるであろう。

しかしそれでも、ひょっとしてすぐに帰ってこなかったら、迎えに行くことになる。

上掲の連続した三つの narrative paragraph に現れた全ての人称代名詞、指示詞についてその指示物との対応関係を列挙すると次の通りである。

出現順序	三人称代名詞 単数      複数	一人称代名詞	指示詞	指示物
(a)	kanya			Benigno
(b)	niya			Benigno
(c)	niya			Benigno
(d)	kanya			Benigno
(e)	siya			Benigno
(f)	niya			Benigno
(g)	kanya			Benigno
(h)	kanya			Benigno
(i)		ko		運転手
(j)	siya			Benigno の妻子
(k)	siya			Benigno
(l)	kanya			Benigno
(m)			nito	Virginia
(n)			ito	両親宅への訪問
(o)			ito	Virginia
(p)			ito	Virginia
(q)	siya			Benigno

ここで注目すべきは(2)の第一行目で導入された固有名詞 Benigno が最後まで一貫して単数三人称代名詞によって、また 8 行目で導入された固有名詞 Virginia がやはり一貫して第一系列指示詞によって指示されているということであろう。なお、(i)及び(j) は narrative paragraph にはめ込まれた引用表現の被伝達部に現れた人称代名詞であり、(n)は抽象物、状況などを受ける指示詞の例であり、いずれも(2)全体からすれば marginal な位置しか占めていないとみなすことができよう。

このような人称代名詞と指示詞の使い分けは何に帰因するものであろうか。それはひとえに(2)が一貫して Benigno の視点(久野:1978)から語られているという点にかかっているように思われる。つまり、そこでの主たる登場人物は一貫して Benigno であり、八行目から導入された Virginia は Benigno の目を通して語られる副次的登場人物に過ぎないのである<sup>(12)</sup>。また、インフォーマントによれば(2)に現れた単数三人称代名詞には第一系列指示詞に対してよりも一層強い関わり合い(involvement)が感じられるとのことであるが、このことも人称代名詞と指示詞の使い分けの問題と視点の問題との密接な関係を示唆していると思われる。また、同様にインフォーマントによれば、例えば(2)の(o)及び(p)の指示詞 ito を人称代名詞 siya に置き換えることも許されるが、その場合(q)の人称代名詞 siya はその具体的指示物である Benigno に置き換えられなければならないという。つまり、副次的登場人物が paragraph の途中からいわば主たる登場人物に昇格可能であるものの、<sup>(13)</sup>その場合に指示関係の一貫性に破綻が生じるならばそれが修復されなければならないのである。このことは結局、人称代名詞と指示詞の使い分けが指示関係の一貫性、ひいては視点の一貫性と関連しているという上記の考え方と合致するものであると考えられる。

ところで、以上のような性格を持つ人間指示の第一系列指示詞は dramatic paragraph ではまず使用されない。

- (3) Wala rin si Conrado. At si Junior man ay parang wala rin. Tinawag niya ang alila nila.  
 "Nasaan *sila* ?"  
 "Wala po," tugon ng alila. "Umalis po *sila*, Senor."  
 "Saan nagtungo ?"  
 "Ewan ko po. Umalis po *silang* lahat kanina. Hindi po sinabi kung saan *sila* tutungo." (SSL: 42)

Conrado もいなかった。Junior もいないようであった。Benigno は使用人を呼んだ。「みんなはどこにいる？」

「おられません。お出掛けになりました。」とその使用人は答えた。

「どこへ行ったのだ？」

「存じません。先程皆さんでお出掛けになり、どこへ行くともおっしゃいませんでした。」

インフォーマントによれば、上記の対話部分において人称代名詞の代わりに第一系列指示詞を用いるのは難しいという<sup>(14)</sup>。それはまず第一に、この対話の当事者のそれぞれの視点が人称代名詞 *sila*



(彼ら=Benignoの家族)の視点に接近しており、従ってその人物らがいわば narrative paragraph における主たる登場人物と同じ扱いを受けているためである。第二に、3.2.で既に触れたように人間指示の指示詞には相対的な侮蔑感が伴っており、対話中で使用するには抵抗があるからであろう。このことは逆に言えば narrative paragraph 中に用いられている人間指示の第一系列指示詞には専ら指示物との心理的距離に基づいた指示機能しか見いだせないということを意味している<sup>(15)</sup>。

ところで、この節で指摘した人称代名詞と指示詞との親近性にはなお次のような形態論的、意味論的支持が与えられる。第一に、人称代名詞は単数・複数の区別が形態上も厳格であるが、一般名詞はそうではない。ところが指示詞はその中間の様相をしめし、単数では人称代名詞と、複数では一般名詞と類似の形態的振る舞いを示す。この点は人間の注意力が非人間的的存在によりは人間に向かい、同時にその対象を限定する方向に選択的に働く傾向にある (Kirsner 1979:361)、ということの一つの表れであろう。

(4)	三人称代名詞	第一系列指示詞	一般名詞
単数:	siya	ito	ang bahay (家)
複数:	(*ang mga)sila	(ang mga )ito	ang (mga ) bahay

第二に、人称代名詞は clitic であるが、指示詞と一般名詞はそうではない。しかし、指示詞には時に clitic 化現象が観察される。

- (5) .....Maglakad-lakad kayo nang kaunti pakanan at makakakita kayo ng naghimpil na dyip. Papunta 'yong San Jose. Mga tatlong kilometro mula rito. (BCPL :119)

少しばかり右手に向かって歩いていくとジープニーの止まっているのが見えますよ。それがサン・ホセ行きで、ここから三キロぐらいですよ。

#### 4.3 第三系列指示詞の用法

ここでは4.2.で問題としたもう一つの点、つまり narrative paragraph において人間を指示物とする指示詞はなぜ専ら第一系列であって第三系列ではないのか、という点との関わりを中心に第三系列指示詞の用法を考察する。

narrative paragraph における第三系列指示詞の典型的用法は次の通りである。

- (4) Maliwang ang umaga noon . Ang panahon ay kaayaaya, at ang hangin ay parang dampi ng buntung-hininga sa pisngi. Subali't lingid sa kamalayan ni Benigno ang lahat na *iyon*. Nasa loob siya ng isang silid na air-conditioned, naiddlip; sa loob *niyon*, hindi nakapaglalagos ang sinag ng buwan sa gabi, ni ang sikat ng araw sa umaga. Laging nakasara ang mga bintana, upang kaipala'y makita ang mamahaling kurtina na buhat pa sa Hongkong; *iyon* 'y yari sa telang damask na kulay maroon at umano'y mahirap matagpuan sa alin mang mansion ng sino mang opisyal ng pamahalaan.

Nang magising si Benigno, wala na sa kama ang maybahay niyang si Virginia. Tumingin siya sa kanilang pambihirang relas na nasa tokador: *iyong* regalo ng isang may pagawaan ng relas sa Swisa. Alas 10:00 ng umaga.

(SSL:2)

その時、朝は明るかった。天候は気持ちよく、風も頬を撫でていくため息のごとくであった。しかし、それら全てが Benigno の知るところではなかった。Benigno はエアコンのきいた部屋の中でうとうとしていた。その部屋の中までは夜の月明りも、朝の陽光も入り込めないのだった。窓はいつも閉めてあったが、それは多分香港製の高価なカーテンが目に残るようにという心積もりからであった。そのカーテンはえび茶色のダマスク生地できており、政府のいずれの役人のどの邸宅にも見出し難いほどの代物であるという。

Benigno が目を覚ました時、妻の Virginia はもうベッドにいなかった。Benigno が鏡台に置いてある時計を見ると朝の十時であったが、その時計は非常に珍しいものでスイスの時計工場の持ち主からの贈り物であった。

ここに用いられている第三系列指示詞はいずれも物、抽象物、状況などを指している。そしてそれらはいずれも語りの情報構造の観点からすれば語りの展開を主とする foreground にではなく、展開する語りの背景描写を旨とする background に用いられている。<sup>(16)</sup>

このような事実を前にし、4.2.での考察を考え合わせると、narrative paragraph における人間指示の指示詞がなぜ第一系列に限られているのかの一端が明らかとなろう。narrative paragraph とはその定義上、一人称または三人称の登場人物の行動の時間軸に沿った継起的展開を中心とする語りの形式である。従って語り手(=作者)が登場人物に言及する時、それは第一義的に foreground においてなされることになる。また、narrative paragraph は4.1.でも触れたように聞き手(=読者)を一応考慮外に置いた語りの形式である。すると、そこに現れる人間指示の第一系列指示詞とは、語り手が専ら自分自信の観点から narrative paragraph 内の主要素に言及するときに用いられる指示詞であると考えることが許されるであろう。もちろん、ここでいう主要素とは4.2.で観察したような人間指示の役割しか持たない人称代名詞の指し示す指示物と比較すれば、その語り内での重要性の度合いの相対的に低い要素のことである。従ってそれは、4.1.(1)の二例の *ito* や4.2.(2)(n)の *ito* のように、人間以外の抽象物、行動、状況なども narrative paragraph 内において指しうる。しかし、それらの第一系列の指示詞の指示する指示物もやはり語りの展開における副次的主要素であると見なされていると考えることができよう<sup>(17)</sup>。

以上の考え方を側面から支持する事実としては次のようなものがある。第一に、3.1.で触れたように第一系列の指示詞の使用には話し手の指示物に対する強い思い入れが伴っているというインフォーマントの意見がある。第二に、全系列の指示詞が anaphora としての用法を持つが、第一系列の指示詞しか cataphora としての用法を持たない。

- (5) Ang sinabi niya ay  $\left\{ \begin{array}{l} \text{ganito} \\ *ganyan \\ *ganoon} \right\}$  : "Pupunta ako sa tindahan at saka..."

彼はこのように言った。「店に行ってから...」

つまり discourse 内に新たな要素を持ち出す時には第一系列の指示詞しか使用されない。

また、第三系列の指示詞についてその background 的性格を明らかにする証拠としては他に次のようなものがある。第一に、その ng 形、特に noon は過去のある一時点を指すのに用いられる。

- (6)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{Pumunta} \\ *Pupunta} \right\}$  ako sa Pilipinas noon.

私はその時フィリピンへ行った。(pupunta = 「行くだろう」)

さらに、その指示詞 noon は narrative discourse の導入部分、典型的には民話の語り出しの部分にしばしば使用される。

- (7) Noong unang panahon, may mag-asawang nagngangalang Emilio at Marcela.  
Sila ay may anak na dalagang ang pangalan ay Rufina ..... (MANP:51)

昔々、エミリオとマルセラという名の夫婦がいました。そしてその夫婦にはルフィナという名の娘がありました。.....

つまり、noon は過去に起こったかまたは起こったと思われる事件に対し、その時間的状況設定を行う機能を有していると認められる<sup>(18)</sup>。

第二に、小論では深く取り扱わなかった事実として推論 (inference) と指示詞との相関関係の問題がある。

- (8) Mr. Gomez : Mawalang-galang na po. Maaari po bang magtanong ?

Takilyera : Ano po *iyon* ?

Mr. Gomez : Kailan ho ipapalabas ang "Ganito kami noon, paano kayo ngayon ?"

Takilyera : Sa Miyerkoles pa ho, ika-15 ng Agosto.

Mr. Gomez : *Ganoon* ho ba ? Anong oras ho ang first showing ?

Takilyera : Alas nuwebe kinse ho ng umaga. .... (PB : 25)

Mr. Gomez : 失礼ですが、お尋ねしてよろしいでしょうか。

Takilyera : 为什么呢。

Mr. Gomez : "Ganito kami noon, paano kayo ngayon" (映画名) はいつ上映されるのでしょうか。

Takilyera : 八月十五日水曜日です。

Mr. Gomez : そうですか。第一回目の上演は何時に始まりますか。

Takilyera : 朝の九時十五分です。

インフォーマントによれば、上記の対話に現れた第三系列指示詞の二例はいずれも第一及び第二系列の指示詞では代用することができない。

- (9) Ano po  $\left\{ \begin{array}{l} *ito \\ *iyan \\ iyon \end{array} \right\} ?$       (10)  $\left\{ \begin{array}{l} *Ganito \\ *Ganyan \\ Ganoon \end{array} \right\} ba ?$

対話(8)は dramatic paragraph であるから、そこで第一及び第二系列の指示詞が用いられないのは 4.1.で述べたことからするといかにも奇妙である。しかし、それは対話の当事者の側における推論行為の存在に基づくものであるように思われる。つまり、[問うてよいか]という一方の話し手の発話に対し質問の存在を推論し、[それは何か]と問い返したり、[八月十五日水曜日に映画が上映される]という情報に接してそのような行事予定の存在を推論し、[そうなのか]と確認を求めているのである、と考えられる。そして、そのような推論行為の結果としての指示作用は、対話における当事者にはその対話の円滑な遂行のために background の確定作業が不可欠であるということの一つの現れであるように思われる。

## 5. おわりに

以上、小論ではタガログ語に見られる三系列の指示詞について、それを指示詞の situational reference 及び textual reference の観点から、特に後者の観点から、discourse あるいは paragraph のgenre の区別に留意しつつ考察を行った。その結果、4. から4.3 にかけてもしばしば触れるところがあったように、その situational reference 用法と textual reference 用法とには、genre の区別に帰因する違いを除いては有意味な差異を何ら見い出せず、かえって両用法には共通点が多々観察されたが、このことは言語の体系性、経済性などと考え合わせるとある意味で当然のことであろう。従って、小論では両用法を敢えて区別しない立場を取ることにする。

すると、三系列の指示詞の指示機能はそれぞれ次の通りである。第一系列指示詞は専ら話し手の立場から聞き手を特に念頭に置くことなく使用される。それは drama においては話し手に身近な事物を指すことに通じるし、そこに指示物に対するある種の思い入れも感じることができる。また、narrative 的場面においては語りを能動的に展開せしめんとする精神の躍動が感じられる。第二系列指示詞は専ら話し手が聞き手からのフィードバックを期待しうる場面で話し手によって使用される。従って、それは drama において専ら使用され、narrative 的場面において用いられることはご

くまれである。<sup>(19)</sup> またその drama 的場面にあつては、例えば situational reference 用法の下では聞き手の身近にあるものを通常指すかもしれないが、それにとどまらずその textual reference 用法の下では聞き手の側からの反応が期待されうる限りにおいて聞き手に積極的に関わらない事物をも指しうる。ただし、聞き手の存在と一応無関係であると感じられる事物、聞き手が存在するか否かに関わりなくその場の背景の一部として存在すると感じられる事物についてはこの系列の指示詞は使用されない。第三系列指示詞はその対話、語りなどの背景の一部をなす事物を指示するために用いられる。従ってそれは drama 的場面においては、話し手や聞き手から離れた存在と感じられる事物について、また narrative 的語りの場面ではその語りの背景描写において専ら使用される。またそのような背景の確定作用の一環としての推論行為を通じて認知された事物をも指示しうる。

以上の指示詞の各系列に対する解釈は人間の認知活動に基づいているものであるがゆえに、その実際上の運用はかなり流動的なものである。言語使用者各位の心理の赴くところのいかんによって指示物不変のままで指示詞が変わったり、指示詞不変のままで指示物が変わったりしうる。しかし、そのような流動性こそが指示詞の存在意義の大きな一つであるように思われる。

## ANNOTATIONS

本稿をなすに当たり、次の方々にインフォーマントとして御協力いただきました。この場を借りて心から感謝申し上げます。  
Roland Lazol Ubando, Alfonso Veneracion Velasco (共に 1986 年度秋学期大阪外国語大学留学生別科在籍), Macalalad Melissa Ramos (1987 年度春学期同留学生別科在籍), Neriza Sarmiento-Saito (関西日比友の会秘書)

- (1) 名称は筆者のもの。Schachter and Otanes (1972) を参考にした。各形の概略的意味は次の通り。ang 形=フォーカス形, ng 形=所属, 動作者, 対象など, sa 形=所在, nasa 形=存在, gaya 形=様態, heto 形=感情表出, 訴えかけ。また、話者に密着したものを指示するものとして iri の系列があるが、それは方言的、周辺のなものである所以以下の考察の対象とはしない。
- (2) Otanes はフィリピン人研究者であるが、ここでは一応 Schachter を中心に考えた。
- (3) 2.2. (3) や 2.3. (4) は textual reference の例であると考えられる。
- (4) 4. 参照。
- (5) ここでは以下の考察の前提となる箇所のみを引用する。Drama 部分の番号も Longacre に従っている。また方法論的有效性については吉村 (1983) 参照。
- (6) 用語は大塚 (1970) に従う。
- (7) この点、第二系列指示詞は明らかに日本語の指示詞の「そ」系列と異なる。
- (8) 次はその第二系列指示詞の例外的用法の一つである。

Ngunit ang lahat ng *iyon* ay nag-iba na. Ako rin ay kabilang na. Pumintig ang aking puso. Mayabang kong inihiyad ang aking dibdib upang sagapin ang malamig at sariwang hangin ng hinaharap na gabi't pati na ang ganap na pagbibinata.(K:59)

しかし、それら全てが違ってしまった。僕は仲間に入ったのである。心臓が高鳴った。僕は誇らしげに胸を突き出し、その夜の冷たく爽やかな風、それに全き男らしきを取り込もうとした。

ここでは作者があたかも読者が眼前にいるかのように語りかけているのであると考えられる。

- (9) 日本語では指示代名詞が単独で narrative paragraph において人間を指示することはない。

- (10) ここに見られるような第三系列指示詞については4.3.で扱うので、ここでは触れない。  
 (11) ただし、ここでは第二及び第三パラグラフは描出話法の形式を取っている。次例はそうではない通常のnarrative paragraphの一部である。

May dalang toast bread at estrelyadong itlog si Virginia nang *ito'y* pumasok buhat sa kusina. Umupo *ito* sa tabi ni Benigno, at sa isang tinig na malalambing at puno ng pagmamahal ay nagwika, “Ben, ang ating boda de plata ay pumapatak sa Disyembre 5, .....(SSL:4 )

Virginiaはトーストと目玉焼きを持って台所から入ってくると、Benigno のそばに腰を下ろし、愛情のこもった調子で言った。「私達の銀婚式は12月 5日になるわね。....」

- (12) Virginia はその場にいないのであるから当然のことである。  
 (13) 昇格とともに降格の可能性もある。  
 (a) Tinawag niya ang alila niya.(niya=niya)  
 彼は自分の使用人を呼んだ。  
 (b) Tinawag nito ang alila niya.(nito=niya)  
 (c) Tinawag niya ang alila nito.(niya=nito)  
 (d) \* Tinawag nito ang alila nito.(nito=nito)

(b)は昇格の、(c)は降格の一例であると見なすことができよう。また(a), (d)の非適格性はインフォーマントによれば繰り返しが敬遠されるためである（しかしこの点、更に究明を要する）。

また、次例は textual reference 用法で用いられている同類の文である。

- (e) Pagkat laging kumakampi ito sa kanyang ina. (ito =kanya )  
 なぜなら彼はいつも自分の母に味方するからである。(SSL:40)  
 (f) \*Pagkat laging kumakampi ito sa ina nito. (ito =nito)  
 (g) Pagkat laging kumakampi ito sa ina nito. (ito ≠nito)(本例はsituational reference 用法である。)

インフォーマントによれば(e)には書き手の思い入れが感じられるという。

以上の事実は、第一系列指示詞が単文内でその textual reference 用法において同時に trigger と target になることではないということ、およびその理由として指示詞の本来的な機能が situational reference 用法にあるであろうという点が考えられるということ、その二点によって説明されうる可能性がある。

また、インフォーマントによれば、4.1.(1 )において第二文の頭のang bahay niya(彼の家の) niya は事実としては Benigno を指しているが、前文からの情報の流れの関係で Carlos Limをも指しうるといふ。そして、その一義の意味は dahil sa salapi ni Lim(リムのお金のおかげで)まで読み進むことによって決定されるという。このことは narrative paragraph 内に用いられる第一系列指示詞に二義性排除機能があることを示唆している。

- (14) 人称代名詞 sila は一貫してその場に現に存在しない人々を指している。従って、それは textual reference 用法において用いられていることが明らかである。第一番目の sila も narrative paragraph から dramatic paragraph への移行過程にあって作者の観点において textual reference をなしていると思われる。  
 (15) narrative paragraph においては話し手の聞き手に対する丁寧さを示す小辞 po が決して現れないことにも注目すべきである。  
 (16) この場合、第三系列指示詞は日本語の「そ」系列に対応すると思われる。また、用語については吉村(1983)参照。  
 (17) Background において人間を指示物とする第一系列指示詞が用いられることもある。やはり副次的主要素を指している。  
 At kay Conrado naman, parang hindi niya malaman kung ano ang gagawin. Dahil sa *ito'y* isang seminarista, parang walang anumang kailangan *ito*.....(後略)(SSL:40)(niya=ni Benigno)  
 そして、ConradoについてはどうしたものかBenigno には分からないようであった。Conrado は神学生であったから、必要なものはなにもないようであった。……..  
 (18) しかし、例えば第三系列指示詞の ang 形は未来の時点をも指しうる。  
 ” Mabuti. Alam kong ika'y maaasahan., ..... (中略). ....Mahigpit ako sapagkat nalalaman ko na sa balang araw ay mananawagan sa iyo ang Diyos para sa isang katungkulang mangangailangan ng iyong buong lakas at tibay ng loob. At ang araw na *iyon*, awa ng Diyos, ay sumapit na.” (K:61)

結構だ。お前は頼りになると分かっていたよ。..... いつか神がお前を召してお前の力と勇気の全てを必要とする仕事にお就かせになるということが分かっていたから、つらく当たっていたんだ。ところがその日が、ああ、とうとう近づいてしまった。

また、次例から解るようにng形にあるのは時間表出機能のみであって、現在の時点と不連続の過去の一時点を指すのはやはり第三系列指示詞が用いられているためである。

” ..... (前略)....., Tayo'y hindi lamang gutom at mahirap, tayo'y napopoot din dahil sa walang-katarungan at pawang kahihiyan na lamang ang tinitiiis natin *nilong* ilang daang taong nakaraan.”(K.64)

我らは腹をすかし、貧しい暮らしをしているということだけではなく憎しみをも感じているのである。不正と恥辱のみここ数百年間甘受してきたからである。

(19) 他に一人称代名詞包括形 (inclusive) tayo と排除形 (exclusive) kami の区別についても同じことが言える。

## REFERENCES

- Alejandro, R. (1946) *Everyday Tagalog* Philippine Book Co., Manila
- Aspillera, P.S. (1969) *Basic Tagalog* Charles E. Tuttle Co., Tokyo
- Bloomfield, L. (1917) *Tagalog Texts with Grammatical Analysis* University of Illinois Press
- Bowen, J.D. (ed.) (1965) *Beginning Tagalog* University of California Press
- Halliday, M.A.K. and Hasan, L. (1976) *Cohesion in English* Longman, London
- Kirsner, R.S. (1979) *Deixis in Discourse : An Exploratory Quantitative Study of the Modern Dutch Demonstrative Adjectives*, in Syntax and Semantics Vol.12 : Discourse and Syntax. pp.335-75, Academic Press, New York
- Longacre, R.E. (1974) *Narrative versus Other Discourse Genre*, in Advances in Tagmemics, Brend R.M. (ed. ), pp.357-76, North-Holland Linguistics Series 9, North-Holland Publishing Co., Amsterdam
- Lopez, C. (1981) *A Grammatical Comparison of Malay and Tagalog* Cecilio Lopez Archives of Philippine Languages and the Philippine Linguistics Circle, University of the Philippines, Quezon City
- Llamzon, T.A. (1976) *Modern Tagalog : A Functional-Structural Description*, Janua Linguarum, Series Practica 122, Mouton, The Hague
- Minguella, T. (1878) *Ensayo de Gramatica Hispano-Tagala* Establecimiento Tipografico de Plana y Ca., Manila
- Подберезский, И.В. (1976) *Учебник Тагальского Языка*, Издательство «Наука», Москва
- Ramos, T.V. (1971) *Tagalog Structures*, PALI Language Texts : Philipines, The University Press of Hawaii, Honolulu
- Рачков, Г.Е. (1981) *Введение В Морфологию Современного Тагальского Языка*, Издательство Университета Ленинград. (1981)
- Schachter, P. and Otones, F.T. (1972) *Tagalog Reference Grammar* University of California Press, Berkeley
- Totanes, S. de (1865) *Arte de la Lengua Tagala y Manual Tagalog* Miguel Sanchez y Ca., Binondo
- 大塚高信(編)(1970) 「新英文法辞典」(改訂増補版)三省堂
- 久野 璋(1978) 「談話の文法」大修館
- 吉村近男(1983) 「インドネシア語における「語り」への構造的アプローチ」名古屋大学大学院文学研究科院生論集第12号 pp.55-68

## DATA

Alabado, C.S.C. (1983) *Kangkong 1896* New Day Publishers, Quezon City, (K )

- Carunungan, C.L.(1986) *Satanas sa Lupa* Vera-Reyes Inc., Maynila, (SSL )
- Cuasay, P.M.(1973) *Mga Alamat ng Pilipinas* National Book Store, Maynila (MANP)
- de la Torre, V.R. (ed. )(1977)*Readings in Bilingual Contemporary Philippine Literature : Dramas* National Book Store, Manila, (BCPL)
- リリア F. アントニオ(編)(1984)「ピリピノ語文法」昭和59年度言語研修ピリピノ語テキスト1 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(PB)